

---

# 魔剣の鍛冶師

グレイ・ワンド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔剣の鍛冶師

### 【Zマーク】

Z96700

### 【作者名】

グレイ・ワンド

### 【あらすじ】

かつては鍛冶師として高名だった亡き祖父の遺言によりガイウス帝国にある“ホルスヤード学園都市”に入学する事になった若き鍛冶師“ウェルナー・ザルツヴァイ”……。

そこでウェルナーは多くの学園生達を通じて世界の広さとそれ故に起る様々な問題に直面していく……。

## 第0話『プロローグ』（前書き）

こんちちは、作者のグレイ・ワンドです。

この作品は色々なアニメや漫画を見て思いついた作品ですので若干、  
そういう要素が出てきてしまつ所があると思いますがその所は  
ご了承下さいます様、お願い申し上げます。

## 第0話『プロローグ』

剣と魔法が混雜する幻想世界“ファンタジア”……その世界地図に描かれたさほど大きくない大陸の最南端に位置する小さな村に一人の老人と若い男が居た。

二人は家族であり、その小さな村でこれまた小さな鍛冶屋を営んでいた。

そんなある日、老人が老衰で倒れた所から物語の歯車は僅かながらに動き始める……。

～とある小さな鍛冶屋～

「「ホッ、「ホッ……全く、ワシも老いたものだな……」

ベッドに寝たままの状態で咳き込みながら老人は天井を見上げつ  
つ、静かにそう言った。老人の名は“ゾーンズ・ザルツヴァイ”  
……今は小さな鍛冶屋の店主であるが昔はそれなりに名の売れてい  
た鍛冶師である。

「……“爺ちゃん”……」

そして、その老人……ゾーンズの傍らには古びた椅子に座る一人  
の青年の姿があった。

髪は短髪で色は黒。瞳の色は黄色で顔つきはなかなかのものだが  
質素な服装をしているせいかパツと見は些か地味に見える。

先の青年の言葉の通り、彼はゾーンズの孫であり、名前は“ウェ  
ルナー・ザルツヴァイ”……若輩ながらも鍛冶師として十二分な才  
能と技量、そして生涯ゾーンズが到達出来なかつた“神世”の地点  
へ到達しつる“異能”を併せ持つ若者だつた。

「ウェルナー、お前に渡しておきたいモノがある……」

……唐突に、最早自力でベッドから降りる事すら出来なくなつたゾ  
ーンズは上半身のみをゆっくりと起き上ると枕の下に隠してあつ

た一枚の便封をいきなりウェルナーに手渡した。

「中を確かめてみい……」

いきなりゾーンズに手渡された便封の中身をウェルナーは訝りながらも確認すると、そこにはA4サイズの紙が一枚だけ入っていた。

「これは……“ホルスヤード学園都市”の入学案内書?」

便封の中に入っていたモノ……それはこの世界“ファンタジア”において最も勢力の大きな国家たる“ガイウス帝国”が心血を注いで造ったとされる“ホルスヤード学園都市”へ入る為の入学案内書だった。

中を確かめたウェルナーは驚きと戸惑いの表情でホルスヤード学園都市の入学案内書から祖父であるゾーンズへと視線を移した。

「よいか、ウェルナー。ワシはもう長くは持たん……ワシが亡き後、お前はソコへ往き、世界と自分の持つ力の在り方を学べ……」

ゾーンズはそう言つと激しく咳き込みを始めるが構うものかという様に話を続けようとする。

「お前の創つた剣は必ず誰かを不幸にするじゃろつ……しかしながら前の剣は誰かを救う事も出来る」

「自分の信じた道を往き、自分の創る剣に想いを込めよ……そうすれば命を吹き込まれて生まれた剣は必ずお前の想いに応えてくれる」

ゾーンズの遺言とも思える言葉を聞いたウェルナーはいつの間にか黙つて涙ぐみながら何度も何度もその言葉を心の中で反復させながらゾーンズの次の言葉を待つた。

それを知つてかゾーンズは死に往きながらも優しく孫であるウルナーに微笑んだ。

……………そして……。

「孫に看取られて……ベッドの上で逝けるとは……悪くない人生じゃった……なあ……………」

話を終えたゾーンズは最期に一言そう残して。

「おやすみ……爺ちゃん……」

涙を流しながら見送るウェルナーを置いて、ゾーンズ・ザルツバーアイの人生を幕の元に降ろしたのだつた……………。

## 第〇話『プロローグ』（後書き）

プロローグの終了です。

とりあえずこんな感じで幾つかの伏線を出しておきましたので後は  
本編にて御確認下さい。w

追伸：皆様の感想を隨時お待ちしております^ ^

## 第1話『新天地』（前書き）

第1話更新しました……つていうか大幅に修正しました。

昨晩、自分の携帯でこの作品を確認した所、『なんじやこら』……と思わず言葉にしてしまった程のグダグダな作品になっていたのを自覚しました。orz

そこでこれまでの複数の話を纏めて1話に修正し、内容も新たに変更しました。

今まで真に申し訳ありませんでした><

## 第1話『新天地』

ゾーンズ・ザルツヴァイの死からおよそ十日後、暖かな陽気の太陽の下、一台の輸送用の馬車が平坦な草原の道をひたすらに走っていた……。

その馬車には揺られながら安っぽい灰色の服装に身を包み、大きな荷物を持ったウェルナー・ザルツヴァイの姿はあった。

本来、この馬車は荷物を運搬する長距離輸送用であるのだが荷物を目的地に下ろし終えたこの馬車の乗り手にウェルナーは多少の金銭を与えて“目的地”まで乗せて貰っていたのだ。

「おい兄ちゃん、見えてきたぜ」

唐突に馬の手綱を握っていた男がウェルナーを呼んだ。

「よつやく“目的地”に無事に辿り着いたか……」

男の話を聞いたウェルナーはホッと胸を撫で下ろしながら馬車の前側まで移動するとそこには巨大な建造物が広がっていた。

「此処が“ホルスヤード学園都市”か……これは予想以上にデカイ都市だなあ……」

その言葉を呴いておよそ十分後、馬車を降りたウェルナーは正門の近くで巨大な建造物に圧倒されていた。

“ホルスヤード学園都市”は大昔に使用されていたとされる旧城西都市一つを丸々、巨大な学園として新たに改装し、科目も共通のものを除けば大きく3つに取り分けられ、それぞれが剣術科・魔術科・一般教養科といつの間にか呼び習わされる様になつた。

それによつて、学園生は制服の着用と色分けが義務付けられており現在では、剣術科は白、魔術科は黒、一般教養科は紺色の制服とされている。

そんな学園に今日から通う事にウェルナーは内心から緊張と興奮を隠せずにいた。

「……確かに、正門前に受付があるって紙に表記されてたよな……」

何度も田を通した入学案内書を再び確認しているとウェルナーの前に手を振る人の姿があつた。

(……ああ、あれが受付か……)

正門前で受付の人の姿を確認したウェルナーは入学案内書をポケットの中に折り畳むとその人が居る方向へと歩きだした。



／学園都市内部・大通り／

「……こりやまた、凄いな……」

あれからおよそ三十分後、細々とした書類の記入と簡単な説明を終えたウェルナーは正門から大通りへと移動していた。

やや緊張赴きで正門を抜けたウェルナーだったが彼が見たものは数多くの人間の姿と美しく整った街並みの情景だった。

それらのインパクトが強すぎたのかウェルナーはその光景を見た瞬間、暫しの間、唖然としたままその場に立ち尽くしていた。

ちなみに先ほどウェルナーが着ていた安っぽい灰色の服装と持つてきていた大荷物は受付の役員に預けられウェルナーの現在の持ち物は“紺色の制服”とサイフと身分証……そして、制服の腰に装着している自作の“一振りの剣”のみだった。

なお、ウェルナーの着ている制服の色は“紺色”……すなわちウエルナーは“一般教養科”を選択していた。

ウェルナーが一般教養科を選択した理由は複数あるがその中でも最大の理由はやはり祖父ゾーンズ・ザルツヴァイが言った『世界と自分の持つ力の在り方を学べ』という言葉からだった。

……敢えてもう一つ理由があるとするのならウェルナーは剣術も魔術共に才能が無いことを自覚しているからこそ、一般教養科を選択したのだ。

(……「ホン。ヒ、とりあえず」のままこの場所に立ち止くしてもしようがないな。さつさと受付の人が言つてた入学式の会場がある中央の建物“メインオーダー”つて所に向かつてみるか……)

暫しの静寂の後、周囲の生暖かな視線に気が付き、ふと我に返ったウェルナーは無理矢理こじつけを付けて新たなる目的地へと向かつて歩き始める。

……キヨロキヨロと田舎者丸出しの様に辺りを見回りながら……。

（メインオーダー内部）

徒步で周囲を見回りながら進んでいたウェルナーは暫くすると“入学式場”と垂れ幕が下ろされた建物に到着した。

（“メインオーダー”ってどんな建物かと思つたら中央にある城の事だつたのか……）

……そう、メインオーダーと呼ばれる建物の正体はホルスヤード学園都市に滞在する多くの教職員や事務員達の部屋や様々な行事で使用されるメインホールといった各種の施設を兼ね備えたこの街のシンボルとも言える城の俗称だった。

『新入生の皆さんにはメインホールにある大広間まで御集まり下さい』

そのメインオーダーの入り口には上級生とおぼしき数人が案内を行っていた。

「とりあえず、あそこに行けばいいのか」

ウェルナーはそう言つとさりげなく周囲の新入生達の中に混じり、大広間へと向かつて歩きだした。

まさにその時……。

ドンッ。

「うわっ」「んっ?」「

余所見をしながら歩いていたウェルナーは知らぬ間に前を歩いていた人にぶつかってしまった。

「す、すいません!」

自分の非を詫びて頭を下げたウェルナーが再び顔を上げるとそこには大きな体を持った大男が居た。

黒髪に黒い瞳、顔も体もゴシく、その姿はまさに歴戦の戦士といった風貌だった。

「怪我は無いか?」

不意にウェルナーが頭を下げた大男から威厳の有り声で安否を尋ねてきた。

「お、おかげ様で……」

「……いつ場合、一体どうすればいいのか分からぬウェルナーはとりあえず無難な台詞で受け答えをした。

「……硬くなる必要は無い、俺も新入生だ」

確かに良く見ると学年を表す胸元のバッヂには一年の証である星が一つ付けられていた。

「アンクルだ」

「……へつ？」

不意に大男が意味不明な言葉をウェルナーに発し、それを聞いたウェルナーは思わず間抜けな声をあげてしまった。

「俺の名は“アンクル・トマホーク”……誇り高き“ガロン族”的戦士だ」

“ガロン族”……ウェルナーは昔、その言葉を今は亡き祖父であるゾーンズから聞いたことがあった。

(……確かに、ガイウス帝国の中でも険しい山として知られるアイオーム山の麓で生活している戦闘部族で彼らの武勇は戦場で聞かぬ事なしという逸話すら在るほど、優れた戦闘能力を有しているつていう話だったかな?)

(でも確かその反面、金や地位に一切興味を持たないって話だつたよくな……)

そんな有名な部族がなぜ、ホルスヤード学園都市に新入生として此処に居るのか、ウェルナーは素朴な質問を胸に抱いたがとりあえず自己紹介をしてくれたアンクルに対してウェルナーも自ら自己紹介を始める。

「俺の名前はウェルナー。ウェルナー・ザルツヴァイ……アンタと同じ新入生だ、よろしく」

ウェルナーがスッと右手を差し出すとアンクルも大きな手でがつちりとウェルナーの手を握った。

「うむ。これで我らは友となつた」

そういうとアンクルは満足したように両手を組んで首を縦に振つたが不意にアンクルはウェルナーの両腰にある一本の剣に視線を移した。

「お前も戦士なのか?」

どうやら一般教養科の制服を身に纏っているにも関わらず剣と腰に付けている事にアンクルは疑問を抱いているようだった。

「いいや、俺は戦士じゃなくて鍛冶師なんだ。そして、この一振りは俺の自信作だよ」

そういうとウェルナーは自分の両腰に置かれている一振りの剣を

慈しむ様に優しく撫でる。

「……その剣達から、何故か不思議と“力”を感じる」

不意にアンクルがそんな事を口走った。

その瞬間、剣を撫でていたウェルナーはいきなり確信を突かれドキリとした。

確かにこの剣達には他の剣には無い、ちよつとした“特殊能力”が備わっている。

しかし、その事を触りもせず一目見ただけでそう判断できるアンクルにウェルナーは内心、驚きを隠せなかつた。

『まもなく、新入生の入学式が始まります！新入生はメインホールのある大広間までお集まり下さい――！――！』

その時、遠くから入学式の始まりを告げる上級生の声が聞こえてきた。

「……時間の様だな」

そう言つとアンクルは「またな」と最後に一言いつと、剣術科と書かれたプラカードのある方向へ歩き始めた。

「……俺も行くか

そして、アンクルの後ろ姿を見送っていたウェルナーも頭をすぐ切り替えて一般教養科と書かれたプラカードを探して人ごみの中

へと入つていつた  
。

## 第1話『新天地』（後書き）

誤字・脱字・御意見・「」要望・御感想は随時の募集していますので宜しくお願いします。

「一時間後」

「……や、やつと終わつたあ……」

あれからおよそ一時間後、長々しい学園長の挨拶や客品からの訓示などといったどうでもいい話の類いを延々と聞かされていたウェルナー達新入生は入学式を終えると皆、思い思いの表情で学園の大通りまで戻つてきていた。

現在大通りでは各所で上級生達による新入生歓迎のイベントが開催されており、一種のお祭り騒ぎとなつていた。

「……祭りか？」ふと、ウェルナーが隣に視線を移すとそこには何故かアンクルが突つ立つっていた。

「学園の授業が始まるのは明後日かららしいし……折角の祭りなんだ、よかつたら今日は一緒に羽目を外して祭りを満喫しないか？」

何気に、こういったイベントに目が無いウェルナーはそう言つと首を縦に振つたアンクルと共に人ごみの中へと入つていった。

それから一時間もの間、ウェルナー達は一人で各所を巡り、すっかりお祭り気分を満喫していた。

「良いね良いね、お祭り最高」

「同感だ」

豪快に串に刺された大きな肉を頬張りながらウェルナーとアンクルの一人は学園の大通りにある店をおおよそ制覇してのだが不意にギャラリーが多く集まる一角を見つけたウェルナーは面白半分にそこに向かって歩き出した。

「何か始まるんだ?」

手に持つている串に刺さった大きな肉を頬張りながら自分より先に来ていた野次馬にウェルナーは声を掛けた。

すると、野次馬の一人が何も言わず顎で『アレを見てみろ』と合図を送ってきた。

その合図を見たウェルナーはその野次馬の言つ通りに視線を移すとそこには数人の男子生徒と金髪碧眼の美しい一人の女子生徒が互いに剣を鞘から引き抜いた状態で対峙していた。

「……どうやら揉め事が起きてるみたいだな……つてアンクル?」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9670o/>

---

魔剣の鍛冶師

2010年12月11日00時23分発行